

館燈

No.168

2008. 8. 15

<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/koho/kanto/>

目 次

電子ジャーナル価格問題を巡る国立大学図書館協会の取り組みについて（報告）	1
伊藤圭介を生み出した地域の底力を探る －附属図書館 2008 年春季特別展 「濃尾の医術」を終えて－	4
平成 19 年度特別図書（人文・社会科学系）一覧	7
太陽地球環境研究所図書室の移転と 開室について	8
平成 19 年度図書館統計	9
本学教員著作物の寄贈リスト	11
利用者から見た図書館	12

電子ジャーナル価格問題を巡る 国立大学図書館協会の取り組みについて（報告）

井上 修・渡邊 俊彦

国立大学図書館協会は、平成 20 年 4 月 4 日に電子ジャーナルの持続的利用を確保するために、3 頁に掲載する「学術情報流通の改革に向けての声明文－学術基盤である電子ジャーナルの持続的利用を目指して－」という声明文を出しました。この声明文は、高騰を続ける電子ジャーナルの利用を確保するために、大学、関係機関、研究者、学協会、学術出版関係者及び大学図書館が協力して学術情報流通改革に向けて取り組む必要がある事を訴えています。

上記の声明文を受けて、国立大学図書館協会は平成 20 年 5 月 1 日に、「学術情報流通の改革を目指して－電子ジャーナルが読めなくなる!?」と題したシンポジウムを東京大学理学部小柴ホールで開催しました。（写真 1）このシンポジウムでは、基調報告を伊藤義人名古屋大学附属図書館長が行い、パネルディスカッションのパネリストとして、国立大学協会から副会長の丸本卓哉山口大学長、私立大学から深澤良彰早稲田大学メディアネットワークセンター所長、大学図書館から西郷和彦東京大学附属図書館長、学術出版関係者から Derk Haank 氏（Springer Science + Business Media、CEO）、Y. S. Chi（Reed Elsevier plc、Vice Chairman）が参加



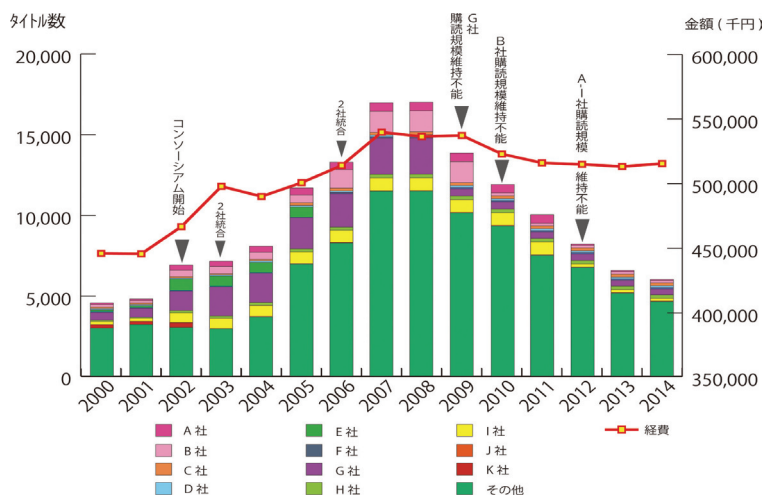
写真 1 シンポジウムでのパネル討論 (5/1)

して行われました。

基調報告では、伊藤館長が電子ジャーナルの際限のない値上げが、学術基盤の崩壊につながることを豊富な例を示して報告をしました。

例えば、次頁のグラフ（「崩壊するビッグディール」）は、折れ線グラフが「経費」を、棒グラフが雑誌の「タイトル数」を示しており、2009 年以降、経費が頭打ちあるいは減少する想定の中、出版 G 社、B 社、A 社などの購読維持が次々と不可能になって行くであろうというシミュレーションを行ったものです。

崩壊するビッグディール(大規模大学)



また、丸本山口大学長は、学長の立場から、深澤早稲田大学メディアネットワークセンター所長は、私立大学の立場から、電子ジャーナルの際限のない値上がりは、学術情報基盤の崩壊につながると強い危機感を表明しました。それに対して、学術出版者は、研究者の増加、研究成果・論文数の増加が電子ジャーナルの値上げの大きな要因であると説明しました。

このシンポジウムによって、電子ジャーナルの問題は、図書館と出版者だけの問題ではないことが認識され、今後、大学、研究者、学協会、出版者、図書館の各ステークホルダーが持続可能モデルを構築するために、継続的な協議を新たに行う事が確認され、閉会しました。

5月1日のシンポジウムのフォローアップ第一弾として、第55回国立大学図書館協会総会(6月26日(木) 仙台開催)において、「電子ジャーナルの持続的利用を目指した学術情報流通改革について」をテーマとしたワークショップが行われました。(参加者：110名、写真2)

第一部では、青天井に上昇を続ける電子ジャーナル価格を巡る各大学の状況、課題、対処方法等について報告、意見交換が行われました。

各大学の状況としては、1) 現行の経費負担は限界に達しており、2) 大手出版社についてパッケージの購読中止を視野に入れているか、すでに中止した大学もありました。3) 購読維持のための経費の出所としては、「部局経費」のほか、「間接経費」「剰余金」などが報告されましたが、4) 決して「持続可能」な状態には



写真2 国大図協のワークショップ (6/26)

ない、ことが改めて明らかになりました。

第二部では、国立大学図書館協会として今後どのような方針・行動を取るべきか、短期・中長期的それぞれの視点から、学術情報流通改革に係る提案及び討議が行われました。

短期的には、全国一律 EJ-only 化、pay-per-view モデルの低価格化、価格モデル自体の複線化など、中・長期的には、オープンアクセス化の推進、機関リポジトリの活用、研究者・学協会・国立大学協会等への働きかけなどが本協会の取組むべき方向性として提言されました。

最後に、世界的に進展の著しいオープンアクセスについて、本協会としてのスタンスの明確化が提案され、「声明の策定」を理事会への付託事項として承認し、閉会としました。

(いのうえ・おさむ 情報管理課長、
わたなべ・としひこ 情報システム課長)

学術情報流通の改革に向けての声明文

－ 学術基盤である電子ジャーナルの持続的利用を目指して －

平成 20 年 4 月 4 日

国立大学図書館協会

本声明は、学術情報流通の重要な形態であり、学術研究の基盤である電子ジャーナルの持続的利用を確保するために、大学、関係機関、研究者、学協会、学術出版関係者及び大学図書館が協力して学術情報流通改革に向けて取り組む必要があることを訴えるものです。

1. 経緯

1990年代後半から電子ジャーナルが普及し始め、2000年以降、従来の冊子体に代わって学術情報流通の一般的な形態となりました。

このような状況下で、日本の国立大学における利用環境の改善をインターネット環境下で実現すべく、国立大学図書館協会は2001年に電子ジャーナル共同購入のためのコンソーシアムを形成し、各出版者の全発行ジャーナルを購読するという包括契約方式を可能にしました。これにより、各国立大学で電子ジャーナルの利用可能タイトル数が3～4倍に増加する等の一定の成果を得てまいりました。

2. 学術雑誌の抱える課題

学術出版者は、投稿される論文数の増加等を理由に、年間5%～8%の学術雑誌の値上げを続けています。このことは、国公私立大学の2004年の外国雑誌の契約総額が、約334億円であることを考えると、国内の大学全体で毎年、学術雑誌について20億円以上の支払額が増加することを意味します。

これに対して、各大学は、全学共通経費化、間接経費の充当等の努力を行ってきましたが、もはやその負担増への対応は大学を取り巻く厳しい財政状況の下で限界に達しつつあります。このままでは、日本の学術情報基盤の核となる学術雑誌利用環境の崩壊は避けられず、また包括契約方式の特質により、その崩壊は徐々にではなく、一気に訪れる可能性があります。

この問題は単に学術雑誌の価格問題にとどまるものではありません。我が国が科学技術創造立国を目指す以上、国際的学術情報の受信と発信は我が国の発展の基盤であり、この中核をなす学術雑誌による学術情報流通の危機は、この基盤の維持に関わる大問題であることを認識する必要があります。

3. 今後の対応

この状況を打開するために、短期的な対応策としては、各大学で、①冊子体を中止して電子ジャーナルのみを購入することにより、全体として低コスト構造に移行する、②科学研究費補助金の間接経費等を学術情報基盤の整備にあてる等を進めることが考えられます。

しかしながら、これらの方策は、あくまでも暫定的な対応にとどまらざるを得ません。持続的に学術情報基盤を維持するためには、中・長期的方策として、①電子ジャーナル等の学術情報の受信及び発信を促進する施策の実現、②まったく新たな学術情報流通システムの構築等を検討する必要があります。

今こそ、すべての関係者が協力して、この危機に叡智を持って対応すべき時であると考えます。是非この問題に対して我々と共同して解決策を見いだすよう切望します。

伊藤圭介を生み出した地域の底力を探る — 附属図書館 2008 年春季特別展「濃尾の医術」を終えて —

齋藤夏来

附属図書館は、おしべ、めしべなど、植物学の基本用語を決めたことでも知られる伊藤圭介(生没 1803-1901) 関係の資料を所蔵しています。残念ながら、圭介の名は一般にあまり知られているとはいえませんが、シーボルトも驚くような学識を示した地域の偉人として、名古屋近辺の小学校や中学校などで、もっと紹介されてもよいのではないかと思います。

確認しておきたいのは、圭介は確かに、個人として卓越した能力を持っていたのですが、地域の底力のようなものがなければ、このような個人も生まれなかつたらう、ということです。圭介を名古屋自慢につなげるために、圭介のルーツや、地域の学術文化とのつながりを明らかにすることは、圭介関係資料を保存する本学にとって、きわめて重要な任務です。

近年、圭介のルーツや、地域とのつながりという問題に迫り得る貴重な古文書が、附属図書館の所蔵に帰しました。古文書の名称は「野間家文書」。尾張藩の奥医師家に伝来していたものです。一見すると、圭介とは何の関係もないようにみえますが、実は、圭介のルーツや地域とのつながりを知る上で、滅多にないストレートな内容を含んでいます。そのような古文書を、偶然ではなく狙いを定めて入手を実現させた関係者の慧眼に、敬服するばかりです。継続的な研究調査のたまものといえましょう。

とはいえ、これまで世に知られていない古文書の常として、箱に無造作に入った状態で、附属図書館研究開発室に持ち込まれてきました。開いてみますと、「野間琳庵」なる人物名がいやに目立ちます。尾張藩の奥医師らしいのですが、一体どのような人物なのか、時代はいつごろか、どのような活動を示しているのか。確定するには、地道な整理の作業にとりかからなければなりません。はかばかしい成果が出ない「危険性」を伴う基礎研究の始まりです。その結果、研究開発室のメンバーの助力も得て、何とか

1000 点に迫る文書目録を完成させ、分析にとりかかり、興味深い点がいくつも明らかになりました。

第一に、野間家の歴代は「林庵」を名乗っており、何代目の林庵か、確定するのに苦勞することになります。幕末の6代目だけ「琳庵」を名乗り、野間家の没落を食い止めようと懸命に活動した人物であることが判明しました。王篇をつけているのが、とても意味のあることだと分かりました。

第二に、奥医師といえば、青い顔をして横たわっている貴人の脈を恐る恐るとるイメージがわきますが、野間家の場合、たしかに尾張藩主一族の脈をとることもあったようですが、主な任務は製薬であることが判明しました。名古屋城に登城して誓約書を提出し、ときに息子を同伴して、紫雪、烏犀円、奇応丸など、高価な薬の製造に従事しています。側用人や小納戸頭など、製薬を管轄していた役人の書状類がまともに残されており、尾張藩機構の一端を知る上でも貴重です。

第三に、ここからが圭介との関連ですが、琳庵の祖父4代目林庵は、圭介の実父西山玄道を門人としており、5代目林庵が、年老いた玄道の扶助について、尾張藩に周旋している辰年(天保3年)の書状が発見されました(末尾の写真を参照)。さらに6代目琳庵も、尾張藩医の重鎮、浅井家主催の医学館において、圭介の実兄、大河内存真を指導する立場にあったことが判明しました。圭介が、実父や実兄を経て、野間家の学識から間接的な影響を受けたことは、ほぼ確実といえましょう。ちなみに、医学館を主催していた浅井家は、在野医師の開業に免許を出すなど、いわば医師免許制度の先駆けをなしたことで著名であり、明治以後は、漢方の復権を求めて、全国レベルで指導的な役割を果たした存在です。

第四に、琳庵は製薬に必要な人参などを調達するために、圭介の実兄、大河内存真とともに、

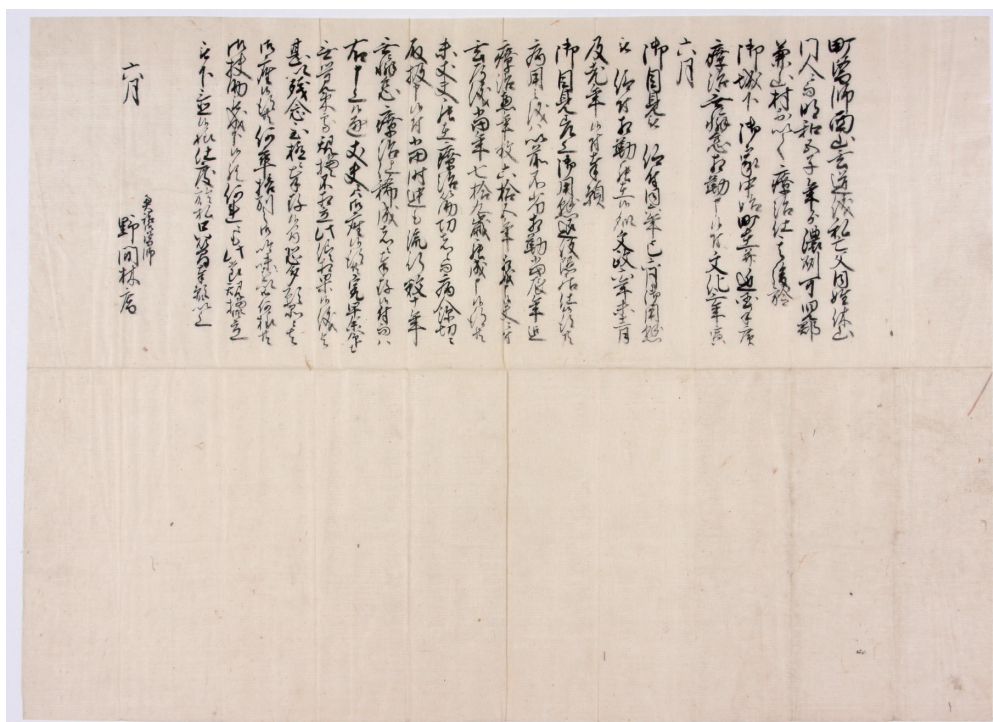
浅井家が管轄していた尾張藩の薬園を訪れている事実が判明しました。薬園では薬草の採取だけでなく、漢方薬として用いられる狐の肝の採取も行われており、関係者が残った皮や肉を山分けしている様子も記されています。圭介の鋭い自然観察眼が、このような場を通じて形成されたであろうことを想像させます。



展示会図録

野間家文書を入手した当初のねらいは、圭介の実母が野間家一族出身であることが分かっていたので、そのあたりの事情がより具体的に明らかになるのではないかと、いうものでした。残念ながら、圭介実母に関する具体的な情報は得られず、野間林庵家の分家筋の出身かと推測するにとどまりましたが、そのかわりに、上記のような思いがけない発見が相次いだ次第です。より詳しい内容は、特別展講演会で講師にお招きした医史学の第一人者、酒井シヅ氏からも高い評価をいただいた展示会図録をご覧ください。これで野間家文書の内容を見尽くしたわけではなく、調査の過程で、他機関にも野間家文書が一部所蔵されていることも判明するなど、まだまだ課題は残されています。ともあれ、研究とは計画どおりに進むものではなく、むしろ想定外の知見が、いかに貴重な「発見」であるかに気づける柔軟さこそ重要だということ、を、改めて思い知らされたところです。諸兄弟のご教示、ご協力を得ながら、さらに研鑽を積んでゆきたく思います。

(さいとう・なつき 附属図書館
研究開発室特任准教授)



圭介実父西山玄道の扶助に関する5代目野間林庵書状

附属図書館 2008 年秋季特別展のお知らせ

「西洋近代思想と永井文庫－最大多数の最大幸福を求めて－」

平成 19 年度に本学名誉教授永井義雄先生より中央図書館に寄贈された数千冊の蔵書の中で、18-19 世紀に刊行された西洋近代思想の広い分野にわたる 600 冊余の貴重な古典資料が「永井文庫」として貴重書室に入りました。功利主義の先駆ベンサム (Jeremy Bentham) やバーク (Edmund Burke)、オウエン (Robert Owen) をはじめとしたイギリスを中心とした 18-19 世紀の思想家や活動家多数の著作原本や研究書、当時のさまざまなトピックについてのパンフレット多数が集められている蔵書です。それらの資料は、すでに中央図書館が所蔵するホップズコレクションやリトルトンコレクション等の資料と一体となってさらに意義を深めるものと思います。

今回、その寄贈を記念して、中央図書館で 2008 年秋季特別展として、その中から何十点かの資料や肖像画などの珍しい資料を公開します。また 10 月 18 日 (土) ホームカミングデイの 14 時から、関連講演会も開催いたしますので、多数のご来場をお待ちしております。

期 間：平成 20 年 10 月 6 日 (月)～平成 20 年 10 月 27 日 (月)
ただし、今回は、土曜日は開室しますが、日曜日と祝日は閉室しますので、ご来場日にご注意ください。

時 間：毎平日、土曜日 9:30～17:00

場 所：中央図書館 4 階展示室ほか

講 演 会：平成 20 年 10 月 18 日 (土) 14:00～17:00

場 所：中央図書館 5 階多目的室

講師・演題：・土方直史中央大学名誉教授「ベンサムからオウエンへー功利主義・民主主義・協同主義」
・柳田芳伸長崎県立大学教授「永井文庫の特徴とその学術的意義」
・永井義雄名古屋大学名誉教授「本を通して出会った人たち」



2008 年度名古屋大学ホームカミングデイ 10 月 18 日 (土)

附属図書館の行事紹介

附属図書館では 10 月 18 日 (土) の第 4 回 (平成 20 年度) ホームカミングデイに、以下の 1～4 の行事を中央図書館で、5 を豊田講堂ピロティで開催いたします。多数ご来場ください。

1. 秋季特別展「西洋近代思想と永井文庫－最大多数の最大幸福を求めて－」9:30～17:00 (4 階展示室等で開催中 10/6～27)
同講演会 (10/18) 14:00～17:00 (5 階多目的室)
2. 図書館見学ツアー (2 階受付集合、10:00、11:00、13:00、14:00、15:00 から職員が 30 分間館内案内をします。なお、当日はラーニング・コモンズ整備工事期間中の予定であり、2 階など一部の見学できない場合があります。)

3. オープンライブラリー（8：45～17：00 館内の自由見学ができます。）
4. スライドショーによる図書館紹介（8：45～17：00 2階南側ホールで上映します。）
5. 本のリユース市（10：00～17：00 豊田講堂南側ピロティで、附属図書館で不用となった本を有償あるいは無償でお譲りします。）



平成 19 年度特別図書（人文・社会科学系）一覧

1. 婦人公論 1～208号 DVD-ROM（検索用システムディスク CD-ROM 付）
近代日本における代表的な女性雑誌であり、近代史・近代文学・文化研究及び女性史研究などの幅広い分野において必須の資料である。DVD の形態によって検索その他が容易であり、汎用性が高い。
2. 昭和前期刊行図書デジタル版集成 CD-ROM
「社会科学部門」－「教育」（団体著作物）1）教育史・教育事情
本文献の特徴は、その網羅性である。国立国会図書館が所蔵する膨大な資料を集成した当該文献はまた、今回初めて公開された発禁書等の「特」文献を含む一大コレクションである。日本の戦前期を知る資料として、教育学研究者のみならず広い分野の研究者にも有用な資料といえる。
3. KGSt-Berichte 1993–2006（154 Berichte）
（ドイツ行政事務簡素化のための自治体共同機関報告書）
KGS は約 1,600 の自治体を含むドイツ最大の地方自治体府協会で、その活動は各自治体に対して、あらゆる局面における指導性、管理、組織化、統治に関してアドバイスをすることにある。これはその Berichte（報告書）である。いずれの先進資本主義諸国においても、国家行政や地方自治行政の組織、活動領域およびその形態は大きな転換期を迎えており、ドイツの官治的集権的行政の伝統を受け継いだわが国においても、ドイツにおける改革の方向性を探る上で有意義な資料である。
4. 中外商業新報 第 55 巻–78 巻（明治 30 年–32 年、全 36 冊 復刻版）
「中外商業新報」は、「日本経済新聞」の前身にあたり、各地の物産相場、輸出入状況、各地商況が詳細に記述され、論説欄も設けられ、当時の実業界の要望に応える実用的情報紙の中心的位置を占めた。その点で、近代日本の経済・経営・社会の研究をする上で必須の基本資料である。これまでに、「中外商業新報」の前身にあたる「中外物価新報」（明治 9～21 年分）と「中外商業新報」第 1 巻～第 54 巻（明治 22～29 年分）を所蔵している。
5. Sexual experience and body culture. German language publications. 1880–1932
（マイクロフィッシュ）
ヨーロッパ近代文化についての問い直しを、精神に対する身体という場面に注目して始めた 20 世紀初頭の基本的文献が多数含まれている。とりわけ身体衛生、女性文化、ヌーディズム、セクシュアリティ、身体技法、スポーツ、ダンスなどに関する文献（写真等の視覚資料も含む）が豊富であり、他に類をみない資料である。

6. 民国画報彙編 北京卷 (全 66 冊 復刻版)

民国期に出版された百種類近くの画報 (グラフィック) を収録。国内外の新聞時事、庶民の社会生活、民風民俗、山水名勝、考古遊記、探奇誌異等の内容を網羅し、当時の政治、経済、科学、芸術、市井趣聞等を記載する。大変めずらしい写真記事が多く、日本では未見のものばかりである。引用価値も高く、中国を研究する文系、建築系研究者に資するところが大きい。

7. 尾張藩士大塩家文書

高木家文書の活用に資するこの地域の武家伝来古文書で、本学で所蔵している野間家文書及び尾張藩関係文書を補完するものである。具体的な内容は先祖系譜類、医学関係の留書、書状などである。本格的な整理作業を要するが、1000 点を超える分量を擁するとみられる。

人脈や武家における情報蓄積について、新たな知見を得られる可能性が高い。



太陽地球環境研究所図書室の移転と開室について

鈴木靖子

2008 年 2 月、太陽地球環境研究所図書室は研究所の段階的な移転の一環として、豊川地区より東山キャンパスへ移転、開室しました。場所は、キャンパスの最も東側、共同教育研究施設 1 号館 1 階の 101 号室です。

太陽研の前身として空電研究所が豊川に設置されたのが 1949 年。それ以来の蔵書を豊川では 1 F 閲覧室と 3 F 書庫の 2 ヶ所に分けて収蔵していたのですが、ここに来てやっとそれらを一つの図書室に収めることができました。3 月には閲覧室と書庫の間に間仕切りを設け、204 m²の空間を目的別に区切りました。



太陽地球環境研究所図書室

また入り口付近には、サービス用対面カウンターや利用者用 PC を新たに設置。「利用細則」「利用要項」も、新図書室に即した内容に、加えて、例えば私費での複写を可能にするなど利用者の利便を考えた内容に改定しました。今まで場所柄、利用者といえば専ら研究所内の教員・学生だったわけですが、これからは学内・学外問わず多くの方に利用して欲しいという期待を込めて、ひとつひとつ整えました。このようなハード面・ソフト面の整備については様々な方にご尽力を頂きましたことを、心より感謝しております。この場をお借りしてお礼申し上げます。

図書室は利用者があるからこそです。学内の方にとっては豊川時代よりもぐっとアクセスが良くなった太陽研図書室。ぜひお気軽にご利用下さい。とは言え、キャンパスの中心からは一番遠い図書室です。せっかく足を運んで下さった利用者にとって不足のないようなサービスを提供できるよう心がけたいと思います。

(すずき・やすこ 研究所事務部経理課)

平成19年度附属図書館蔵書冊数及び年間図書増減数・雑誌受入数

区 分	蔵書冊数 (H20.3.31現在)				平成19年度図書増減数					平成19年度雑誌受入種類数		
	和 書	洋 書	合 計	和 書 受入(増) 除却等(減)	洋 書		合 計 (増)-(減)	和 雑誌	洋 雑誌	合 計		
					受入(増)	除却等(減)						
中央図書館	611,444	452,181	1,063,625	9,667	2,522	3,629	709	2,202	628	2,830		
医学部分館	65,371	108,035	173,406	1,460	743	2,070	549	568	553	1,121		
医学部分館保健学図書室	31,900	6,087	37,987	1,039	253	126	10	365	58	423		
文学図書室※1	160,041	104,255	264,296	4,035	186	1,953	22	894	393	1,287		
教育発達科学図書室	61,205	42,480	103,685	1,501	4,730	757	2,298	383	205	588		
教育学部附属学校図書室	22,519	429	22,948	1,210	1,870	11	4	54	0	54		
法学図書室	125,968	88,941	214,909	2,418	19	1,253	120	539	77	616		
経済学図書室※2	133,864	124,540	258,404	3,479	1,392	3,239	955	706	417	1,123		
情報・言語合同図書室※3	116,921	77,250	194,171	2,976	5,328	1,313	3,145	320	174	494		
理学図書室※4	17,981	68,402	86,383	596	180	1,274	2,829	212	444	656		
数理学図書室	11,724	86,469	98,193	189	2	1,584	7	32	371	403		
工学図書室※5	81,413	121,201	202,614	2,229	5,473	1,853	2,266	901	361	1,262		
生命農学図書室※6	49,638	48,570	98,208	1,265	293	523	3,249	1,147	250	1,397		
国際開発図書室	25,698	28,502	54,200	2,860	21	2,915	5	95	155	250		
環境医学研究所図書室	935	5,982	6,917	78	540	38	481	131	29	160		
太陽地球環境研究所図書室	2,593	9,981	12,574	21	33	233	0	13	23	36		
地球水循環研究センター図書室	3,795	12,121	15,916	98	0	485	551	71	107	178		
情報連携基盤センター図書室	1,636	3,051	4,687	76	0	85	0	28	3	31		
アイントープ総合センター図書室	193	103	296	1	0	2	0	6	1	7		
留学生センター図書室	2,779	1,407	4,186	95	0	85	0	0	0	0		
総合保健体育科学センター図書室	7,558	4,859	12,417	40	185	20	25	20	18	38		
合 計	1,535,176	1,394,846	2,930,022	35,333	23,770	23,448	17,225	8,687	4,267	12,954		

※1 文学図書室の対象には、環境学研究所の一部を含む。
 ※2 経済学図書室の対象には、附属国際経済政策研究センターを含む。
 ※3 情報・言語合同図書室の対象には、情報文化言語学文化研究科のほか、環境学研究所及び情報科学研究科の一部を含む。
 ※4 理学図書室の対象には、遺伝子実験施設及び年代測定資料研究センターのほか、環境学研究所の一部を含む。
 ※5 工学図書室の対象には、エコトピア科学研究所のほか、環境学研究所及び情報科学研究科の一部を含む。
 ※6 生命農学図書室の対象には、生物機能開発利用研究センターを含む。

図書館利用状況 (平成19年度)

項目	平成18年度	平成19年度	備考
I 奉仕対象者	23,504人	23,841人	学部学生：10,054人 院生：6,337人 教員：3,621人 職員：3,829人
II 閲覧サービス			
1. 年間開館日数	345日	349日	うち土・日・祝日開館：116日
2. 年間入館者数	688,190人	708,922人	うち学外者：39,737人
3. 館外貸出冊数	130,676冊	133,230冊	一日平均：384冊
III 参考調査サービス			
1. 調査依頼者数	2,339人	2,465人	学内者：1,611人 学外者：854人(来館者のみ) 延取扱件数：3,528件 (E-mail, Faxを含む)
2. 他機関への調査依頼	18件	9件	STN：0件 J-Dream：0件
3. 情報検索利用件数	2件	0件	PDF：152件 読売新聞：15件 その他：5件
4. CD-ROM利用件数(スタンドアロン)	196件	172件	NICHIGAI/WEB (マガジンプラス)：25,574件 Web of SCIENCE：81,029件
5. オンライン検索セッション数	142,216件	184,309件	JCR：15,123件 MEDLINE：25,135件 BA：12,607件 ERIC：1,425件
6. 電子ジャーナル利用件数(全文表示)	1,388,159件	1,303,806件	PsycINFO：15,903件 EBM：7,513件 (一部DBは契約変更により12月迄の数値) FirstSearch ECO：2,920件 EBSCOhost：16,048件 ScienceDirect：620,293件 SpringerLINK：59,595件 BlackwellSynergy：60,618件 WileyInterScience：102,676件 ProQuest：3,232件 Emerald：1,244件 PAO：949件 ACS：214,014件 Nature：94,371件 Science：38,169件 OUP：35,136件 BioOne：2,515件 Annual Review：6,737件 Cambridge：6,410件 OVID：16,314件 (※利用統計が採取できるところのみ掲げた。)
7. OPACアクセス件数	1,638,786件	1,733,562件	学内件数：926,863件 学外件数：806,699件
8. 図書館HPアクセス件数	10,239,197件	10,810,685件	学内件数：5,651,110件 学外件数：5,159,575件
IV 相互利用サービス (他機関)			
1. 図書貸出 (貸借受付件数)	1,373件	1,391件	
2. 図書借受 (貸借依頼件数)	421件	479件	
3. 文献複写受付件数	6,651件	7,041件	
4. 文献複写依頼件数	605件	578件	
5. 他機関の利用申請	96件	116件	
V 館内資料の文献複写利用			
1. 文献複写枚数(館内備付複写機利用)	859,671枚	828,668枚	紹介状発行：54件 国立大学共通閲覧証発行廃止(旧2.7)、東海地区国立8大学図書館間で紹介状廃止(旧4.7)
2. コピーデリバリー・サービス	261件	156件	
VI 館内施設利用			
1. 研究個室	2,977件	3,280件	延利用人数：7,720人
2. 演習室・サテライトラボ	35件	34件	延利用人数：638人 (サテライトラボPC利用者数：42,339人)
3. グループ研究室	381件	1,030件	延利用人数：5,073人
4. 共同研究室	187件	388件	延利用人数：780人
5. 視聴覚室	344件	221件	

本学教員著作物の寄贈リスト

中央図書館では、教員著作物等を積極的に収集しています。平成20年4～6月は下記の図書を寄贈していただきました。ここにあらためてお礼申し上げます。

(寄贈者の敬称は略します。)

所 属	寄贈者名	寄 贈 資 料 名	資料 I D	配置場所
教育発達科学研究科	近藤孝弘	ファルク・ピンゲル和解のための歴史教科書 / ファルク・ピンゲル, 近藤孝弘著 - 東京: 日本放送出版協会, 2008.5	11628089	中央学 375.32/P
教育発達科学研究科	平石賢二	思春期・青年期のころ: かかわりの中での発達 / 平石賢二編 - 東京: 北樹出版, 2008.5	11624492	中央学 371.47/H
法学研究科	磯部 隆	古代オリエント世界像からの脱出: ピラミッド・テキストから原始キリスト教までの神話・宗教・政治 / 磯部隆著 - 横浜: 春風社, 2008.3	11623406	中央学 209.1/I
法学研究科	和田 肇	労働法重要判例を読む / 唐津博, 和田肇編 - 東京: 日本評論社, 2008.5	11627177	中央学 366.18/Ka
法学研究科	中東正文	検証会社法: 浜田道代先生還暦記念 / 浅木慎一 [ほか] 編 - 東京: 信山社, 2007.11	11627176	中央学 325.3/A
経済学研究科	多和田眞 家森信善	関西地域の産業クラスターと金融構造: 経済の活性化策を探る / 多和田眞, 家森信善編著 - 東京: 中央経済社, 2008.4	11625077	中央学 332.16/Ta
国際開発研究科	北村友人	The political economy of education reforms and capacity development in Asia / series editors, Yasushi Hirotsato and Yuto Kitamura	41451083	中央図 372.2/H
国際開発研究科	北村友人	発展途上国の基礎教育開発における国際教育協力融合モデルの構築: 「万人のための教育」目標達成へ向けた能力開発	11626316	中央図 370/N
国際開発研究科	浅川晃弘	GSID 実用ハンドブック = GSID practical handbook / 名古屋大学大学院国際開発研究科・留学生相談室編集 (第6版) - 名古屋: 名古屋大学大学院国際開発研究科留学生相談室, 2007.3	11624514	中央学 377.9/N/ 留
国際開発研究科	山田肖子	アフリカのいまを知ろう / 山田肖子編著 - 東京: 岩波書店, 2008.3	11622431	中央学 S 302.4/Y
環境学研究科	広瀬幸雄	環境行動の社会心理学: 環境に向き合う人間のころと行動 / 広瀬幸雄編集 - 京都: 北大路書房, 2008.3	11624498	中央学 519/H
環境学研究科	八田武志	脳のはたらきと行動のしくみ / 八田武志著 - 東京: 医歯薬出版, 2003.10	11625076	中央学 491.371/H
国際言語文化研究科	松本伊瑛子	グローバル化で変化する日仏の国家アイデンティティ, ジェンダー関係, 社会格差 = La mondialisation en France et au Japon: identités nationales, genres, rapports salariaux / 松本伊瑛子, 田所光男編著 - 名古屋: 名古屋大学大学院国際言語文化研究科, 2008.2	11628219	中央学 361.04/Ma
医学部保健学	加藤智香子	大腿骨頸部骨折予防技術による施設介護高齢者の転倒恐怖緩和、生活機能及び QRL の維持・向上に関する研究 (平成18年度) - [出版地不明]: [出版者不明], 2007.3	11628095	中央学 494.74/H
医学部保健学	加藤智香子	大腿骨頸部骨折予防技術による施設介護高齢者の転倒恐怖緩和、生活機能及び QRL の維持・向上に関する研究 (平成19年度) - [出版地不明]: [出版者不明], 2007.3	11628096	中央学 494.74/H
医学部保健学	加藤智香子	ヒッププロテクターによる介護施設の大腿骨頸部骨折予防研究 - 製品差の検討: 平成16年度～17年度厚生労働科学研究費補助金長寿科学総合研究事業総括研究報告書 - [出版地不明]: [出版者不明], 2006.3	11628098-9	中央学 494.74/H
名誉教授	岩崎宗治	Shakespeare's vision of social reformation / by Soji Iwasaki - Tokyo, Japan: Renaissance Institute, Sophia University, 2008	41450326	中央学 932.5/Sha-Iw
名誉教授	中尾祐治	Philological and Textual Studies of Sir Thomas Malory's Arthuriad / 中尾祐治著 - 英宝社, 2008.2	41449856	中央学 930.28/N
名誉教授	柏瀬和司	楽しい玩具の実験からはじめるなっとく物理学入門 (その2) / 柏瀬和司著 - 名古屋大学生協印刷・情報サービス部	11626899	中央学 420/Ka

《利用者から見た図書館》

書架めぐり

徳田 枝理

教育学部の図書室でアルバイトをするようになって、もうすぐ1年になる。日常業務の中で最近のお気に入りには書架の整理である。利用者が返却した本を書架に戻す作業は、日ごろ自分が立ち寄らない書架をのぞくことのできる、意外と楽しい時間なのだ。この時間のおかげでたくさんの本に出会うことができた。作業中にも関わらず、思わず手にとって中を見たくなくなってしまふこともしばしばである。おかげで仕事がちっともはかどらないこともあるが、読んでみたい本が次々と出てきて、楽しくなってしまう。

「研究」という言葉に身構え、「専門書」という言葉に厚い壁を感じていた私は、長い間学部の図書室を敬遠していたが、この時間を通して「専門書」だってやっぱり私の好きな「本」なんだと感じるようになった。一冊本を読むと「これって何?」「本当にそうなの?」という疑問がわいてきて、「もっと詳しく書いてあるものはないのかな」「同じ著者のほかの本はどんな内容だろう」と次々に世界が広がっていくのは同じだから。

幼い頃に「今日はどの本にしよう」と図書館で本に囲まれながらわくわくした時間を思い出す。どうしても選びきれなくてハードカバーの分厚い本ばかりを、はちきれそうなバッグにつめこんでいたあの頃のように、ついつい、あれもこれも手元においておきたくなってしまふ。借りられる冊数ぎりぎりまで借りて、結局読めずに返却なんてこともあるけれど、面白そうな背表紙がずらっと並んでいる本棚を見るだけで、にやりと笑ってしまう。

図書室の書架めぐりは、どうやら私の研究へのモチベーションを上げるらしい。専門書だから、研究だから、「難しいもの」ではなくて、私の研究は「私が興味をもったこと」からはじまっていたはずだ。ずらりと並んだ本を見るだけでわくわくできる私、実は研究に向いてたのかもよ、なんて思える唯一で貴重な時間でもある。

(とくだ・えり 教育発達科学研究科
博士前期課程2年)



所蔵されるものとは何か

—形成される「教養」と大学図書館—

鈴木 良幸

大学図書館の利用について考えるとき、先人達が明らかにしてきたものに学ぶという視点の重要性を忘れてはならない。そこには問題に対する一著者のライフ・ワークのみならず、幾人にも及ぶ先人達の探求のプロセスが納められている。それは「教養 bildung」への道しるべとなっているからである。

大学図書館とはどんな存在なのだろうか。福沢諭吉は『西洋事情』で、ヨーロッパの図書館「ビブリオテーキ」bibliothekを紹介した。この

言葉は、書物を意味するラテン語 biblia と箱や入れ物を意味する thēca が結びついたものである。書物とは、空間と時間の広がりをもって人々に伝える媒体だ。人が捉えた「真理的なもの」は、文字によって紙に記録され、モノとなる。

書物だけでなく、キリスト教における聖書 bible もラテン語の biblia に由来する。さらにその語は、エジプト語起源の外来語 hē bíblos から来ている。それは、書物一般を意味した。のちには「神の言葉を写し」た「聖なる古い尊敬す

べき書物」という意味を持つようになる。

人々はこうした書物 *biblia* を読むわけだが、写しとられた神の言葉を身につけることは、人間を自然状態から普遍的な神の似姿へと形づくることを意味した。これが「教養 *bildung*」と呼ばれるものである。人間性は素地として与えられているに過ぎない。人間として人格を持つには、それを形成していく過程を経なければならぬのだ。

500年頃の修道院には、図書室が設けられていた。聖書や先聖の著作、古典、歴史、地理、音楽、農業などの図書が備えられたという。

もちろんキリスト教以外の場合にも、偉大な人物が探求したものや、貴重な知識を、文字によって紙に書きとめ、それを大切に扱ったということは、想像に難くない。日本にも「文庫」があった。奈良時代の大寺院には、仏書や外国の書が蔵された。それ以外にも中世には武家、公家、家で蔵書する場を持っていた。

ヨーロッパ中世において図書館は、真理の追究の場としての教会と結びついていた。しかし、宗教改革以降その結びつきを断つことになる。

代わりに大学と結びつき、科学を基盤とした学問的真理を蓄積するセンターとして機能しはじめる。人々の真理の探求の場は、大きく変化したのだ。大学図書館の最古のものの一つはソルボンヌ大学のものである。1290年には1,000冊の図書が集まっていたという。

こうして大学図書館が、中心を担うこととなる。そこには先人達がライフ・ワークとした、

つまり人生をかけた問いと、それに対する業績を所蔵する。これは「教養」がどう形成されるかということについても大切な要素となる。だから、どんな規模の図書館においても、蔵書をどう構成していくかということは、重要なことだ。

大学図書館は、私たちのように、問い、学ぶものにとって不可欠の存在である。先達がその問いについて、どこまで考え抜いてきたかを知ることができる重要な場なのだ。実際、私たちが探求せねばならないある問題を辿っていけば、先生の先生というように、先達が何代にもわたり考えてきた問題であることがほとんどである。

名古屋大学には、学問の現在を体現する先生が1,754人（平成20年5月現在）いる。そしてさらにその後ろには、名古屋大学の全図書館の蔵書2,930,022冊（平成20年3月現在）となった先生が応えてくれる。私たちは、こうして先人が究明した問題とはどのような問題であったのかを知り、現代において私たちが捉えた問題との比較によって新しい視座を得ることになる。

大学図書館の利用ということには、以上のようなことが基底に横たわっている。先人に学び、現代に生きる私たちの問題を考える場なのである。

（すずき・よしゆき 文学研究科
博士後期課程3年）

「館長と話そう！ 2008」開催予定

附属図書館では毎年1回、学部学生、大学院学生、留学生などの図書館利用者と附属図書館長の懇談会を開催していますが、平成20年度の第6回目の開催予定は以下のとおりです。

参加者の募集の詳細は、9月以降ポスターやホームページで広報されますが、多くの利用者の参加をお待ちしております。日頃から図書館について感じていることや希望、新たな提案などを館長と一緒に語り合ってください。

日 時：平成20年10月下旬、平日の12:00～14:00を予定

場 所：中央図書館会議室

参加者：本学の学部学生、大学院学生（留学生を含む）

お 知 ら せ

☆ 中央図書館4階研究個室を学部学生にも利用開放しました (年内試行)

中央図書館では学部学生から卒論やレポート作成など長時間籠って個室を利用したいことがあるので、研究個室を利用できるようにして欲しいとの希望がでていました。中央図書館ではそれに応じて、8月1日から試行サービスを始めました。

利用できるのは、学部の正規学生で、1コマ約4時間、1日は午前・午後・夜間の3コマですが、学部学生は最大1日間の利用ができます。予約も最大1日までですが、利用予定日の1週間前から予約可能です。

☆ 中央図書館の4階窓際のパーティション区切個室を増設しました

4階の南北の窓際にあった閲覧席をパーティションで区切り、より静かな個室環境で研究・学習活動ができるように、従来の16席から18席を追加して34席を増設しました。従来から利用が多かった席ですが、静かな場所でじっくり資料に取り組むには最適な空間です。予約などは必要ありませんので、自由にご利用ください。



「附属図書館 2008 年夏展 アートを楽しむ」開催のお知らせ

中央図書館4階展示室では、7月22日より9月末まで、内容を新たにした常設展示 2008 夏展を開催しています。

今回のテーマは、「アートを楽しむ」ということで、中央図書館の所蔵資料の中から、近代-現代の国内外の絵画(複製)を何点か選んで展示しています。

おもな画家は、鳥居清長、望月玉泉、勝川春潮、雪舟、尾形光琳、高山辰雄、加山又造、岩田専太郎、平山郁夫、牛島憲之、藤田吉香、ブリューゲル、戴敦邦など、時代もジャンルも多彩な作品を並べました。

普段は見ないものもあると思われますので、是非一度ご来場ください。

場 所：中央図書館4階展示室

時 間：平日8:45~17:00(土・日・祝日は閉室)

【行事等】 < 20. 4. 6 ~ 20. 7. 5 >

- ・名古屋大学附属図書館 2008 年春季特別展「濃尾の医術」(中央図書館) <4/14-5/2> 421 名、講演会 75 名
- ・図書系職員初任者研修(中央図書館) <7/1-3>
- ・研究開発室オープンレクチャー(第30回)(中央図書館)「オープンアクセス: 学術流通の新潮流」講師 三根慎二 <5/19> 60 名
- ・七夕の宵ヴァイオリンコンサート(中央図書館) 演奏 塩見裕子氏 <7/5> 140 名
- ・附属図書館友の会トークサロンふみよむゆふべ(第12回)(中央図書館)「天下人の画像賛」かたり 齋藤夏来 <6/16> 83 名
- ・研究開発室オープンレクチャー(第31回)(中央図書館)「江戸時代とはどんな時代だったのか?」講師 種田祐司氏 <7/14> 30 名
- ・医学系研究科大学院基盤医科学実習「文献検索」(医学部サテライトラボ) <6/24-7/4> 127 名

編集委員会
 増田晃一(委員長) 福岡千絵(中) 長野祐子(中)
 立花千津子(中) 早川沙耶華(文学) 山口典子(法学)
 金田志保(保健学) 端場純子(工学)